家康も愛した 潤いと憩いの源

グラフィック・若泉祥子

新型コロナウイルスの緊急事態宣言が解除されましたが、引き続き感染予防に十分、ご留意ください。開園や開館の状況、時間につきましては、各施設にご確認ください。

清らかな水復活へ かいぼり作戦

井の頭池は近年、水がきれいになったと言われている

「まるみが感ぜられ柔く、やゝ甘い。きめのこまやかい感じもある」

文明批評でも知られる文芸評論家の亀井勝一郎はお茶を入れた水を、そう表した。東京都立井の頭公園(三鷹市・武蔵野市)の井の頭池の北西にある湧き水「お茶の水」を、持ち帰ったものだ。水道や井戸水と違い「実にいゝ味である」とも。それほどなら、飲みたくもなる。だが、井筒から流れる水はエッセー「井の頭の水」が発表された1952年当時と異なり、近くの井戸からくみ上げた飲用ではないものへと変わっている。

井の頭池の北西端にある、お茶の水からは、くみ上げた地下水が流れ出ている

「お茶の水」の名は1606年、徳川家康がこの清らかな冷たい水でお茶を入れたことから、付いたという伝説が残る。周囲で鷹(たか)狩りをした3代将軍・家光は、「井の頭池」と称することを命じたとも伝えられる。井の頭池から流れた水は、現在の文京区で取水され神田上水を通じて江戸の市民にもたらされた。

1921年に開設された井の頭池の水泳場＝東京都三鷹市教委提供

「井の頭池は、神田上水の源泉であることから、井の頭弁財天とともに江戸近郊の名所だった」と、三鷹市学芸員の下原裕司さん(55)。それは弁財天の参道に立つ石の道しるべと、黒い鳥居の形をした「黒門」にも表れている。道しるべは、道路の案内標識の役割を果たしていた。

そんな名所が、井の頭公園として開園したのは1917(大正6)年。三鷹市の牟礼郷土史研究会メンバーの岩崎兼男さん(93)の父親が、地元青年会の仲間とともに、橋の渡り初めなどがあった祝賀会を支えた。「地域の人々の喜びも大きかった」と語る。

池には4年後、水泳場が開設され、25メートルプールが近くにオープンするまで約10年間、子どもらでにぎわった。「水は冷たく、藻に触れながら泳いだという。池の水は楽しみをもたらした」と下原さん。

かいぼりによって、井の頭池の底から水が湧いていることがわかった＝2015年12月、NPO法人生態工房提供

23年の関東大震災後、都心からの移住者で周りは宅地化され、公園は憩いの場として存在感を増す。しかし太平洋戦争で様相は大きく変わる。

牟礼郷土史研究会の岩崎さんによると、公園の杉が船艇を造るために切りだされた。ところが東京大空襲で多くの人々が亡くなり、杉は棺に用いられた。終戦から2年後に発表された太宰治の『ヴィヨンの妻』に「池のはたの杉の木が、すっかり伐り払われて(中略)むき出しの寒々した感じで、昔とすっかり変っていました」と描かれている。

さらに、50年代後半からの高度経済成長期、井戸水のくみ上げなどによって、湧水が枯れ、池の水質は悪化。井戸水を池に流し込み、噴水で散布しても、水質は大きく改善しなかった。

ところが近年、水中の水草が見えるほど透明度が上がり、「モネの名画『睡蓮』のよう」とネットで評判だ。ボランティアらが2014年から3回にわたって水を抜き、天日干しにするかいぼりを実施。都西部公園緑地事務所の犬竹幹人・管理課長(58)は「かいぼりによる改善の効果が大きい」と話す。

NPO法人「生態工房」事務局長の佐藤方博さん(47)によると、かいぼり中に、弁天池で「湧水が生きている」と、歓声があがったという。手のひら大の水が湧く箇所がいくつも見つかったのだ。

水の透明度は、アオコが発生しやすい夏を除き、1・4メートルに改善。水中で餌をとるカイツブリの姿も目撃できる。肉食性のブラックバスやブルーギル、アメリカザリガニなど外来種を駆除して在来種が復活した。佐藤さんは「水質もよくなり、生態系も回復してきている」と話す。

冒頭のお茶の水を含め、深さ約30～160メートルの井戸8カ所から、以前より3割多い1日5千立方メートルを補給していることも改善の要因だ。

「水が澄み、自然豊かだった過去の井の頭池の姿が、文献や写真に残されている。その姿に戻るまで、取り組みをやめるわけにいかない」。佐藤さんはゴールを見すえる。

(平出義明)

幻の水草 60年ぶり確認

「絶えた」と久しく思われていた幻の水草「イノカシラフラスコモ」＝写真、東京都西部公園緑地事務所提供＝が4年前に復活、今年も群生が確認されている。

イノカシラフラスコモは、1957年に井の頭池などで発見されたことから、イノカシラを冠した。フラスコモの名称は、卵細胞をつくる生卵器が実験器具のフラスコに似ていることに由来。この水草は、生卵器の中の卵細胞が、精子と結合して卵胞子をつくる。井の頭池は高度経済成長期、井戸水のくみ上げなどの影響で湧水量が減り、イノカシラフラスコモは絶滅したと考えられていた。しかし95年に千葉県市川市の池に群生していることが確認され、環境省レッドリストで絶滅危惧1類に分類されている。

井の頭池では、2015～16年のかいぼり後、池の一部である弁天池で群生が確認された。生態工房の佐藤方博さんによると、池底の泥の中で約60年間眠っていた卵胞子が、周りの泥を干され、光が当たり、空気に触れたことで、発芽したと考えられている。「うまくすると、かいぼりで復活するのではないか、と半信半疑ながら考えていた。それが実現した。きれいな水が維持されていることのシンボルです」と佐藤さんは語る。